

2019年10月17日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 中<sub>(ちゅう)</sub>によって法を説く

### 1. 概要

#### (1) 資料

『中村 元選集／第11巻』（春秋社）、庭野日敬著『法華経の新しい解釈』（佼成出版社）  
増谷文雄著『阿含経典1』（ちくま学芸文庫）／存在に関する経典群／因縁相応／09カッ  
チャーヤナ

#### (2) 主題

今回は、「中<sub>(ちゅう)</sub>」という教えの真意を尋ねてみたいと思います。

### 2. 「中道」の意味（仏教語大辞典）

中村 元著『仏教語大辞典』（東京書籍）の「中道」の項を学んでみました。

#### (1) 基本的な意味

先ず、「二つのものの対立を離れていること。断・常の二見、あるいは有・無の二辺を離れた不偏にして中正なる道をいう」とあります。

#### (2) 原始仏教

また、「原始仏教においては、主として不苦不楽の中道を意味していた。苦行と快樂の両極端を排斥したのである」とあります。初転法輪における、釈迦牟尼世尊の説法に説かれています。

#### (3) その他

『仏教語大辞典』には、このほか、「ナーガルージュナ（龍樹）」、「成論師」、「天台の慧文<sub>(えもん)</sub>」の説が紹介されていますが、難しくて私には歯が立ちません。

### 3. 「中」は「的中」

私は、詩誌『詩人散歩 令和元年夏号』に、「中<sub>(ちゅう)</sub>について」と題する一文を掲載させていただきました。その一節です。

「私<sub>(浪 宏友)</sub>はヒントを求めて『漢字源』（学研）を開いてみました。

『中』には、名詞として『ものの内側』、『もののまんなか』という意味があります。ずっと見ていきますと、動詞として『あたる』、『ずばりとかなめを突き通す』という意味が出てきました。

『これだ！』っと思いました。そうか『中道』の『中』は、『当たる』なんだ『的中』なんだと胸に落ちました。

すると『極端』は『極めて端っこ』ですから、『的外れ』になるなと思いました。

『中』は『的中』、『極端』は『的外れ』です。

『中道』は『的中している道』ですから、『ぴったり合っている道』としていいでしょう。

『ふたつの極端』は『的外れの道』ですから、『まったく合っていない道』としていいでしょう」(詩誌『詩人散歩 令和元年夏号』)

#### 4. 大先輩のことば

『詩人散歩』を発送してほどなく、ある大先輩から、FAXをいただきました。

そこには、私の解釈について「全く同感も同感、すつんと『胸中』におちました」と記してくださっていました。

「それでよい」と証明してくださったのです。実にありがたいことでした。

#### 5. 中村 元博士の解釈

##### (1) 中村 元博士の言葉

NHK教育テレビでは、「こころの時代」という番組を放映しています。

昭和63年5月22日の「こころの時代」は、シリーズ「東洋の心を語る」の第2回目で、「中道を歩む」と題して、中村 元博士(1912~1999)と、奈良康明博士(1929~2017)が対談なさっています。

そこに、中村 元博士の次の言葉がありました。

「ジャイナ教なんかでも『二つの極端にとらわれるな』ということを用いるんですが、仏教はそれを受けまして、『二つの対立した極端にとらわれるな。さらに中(ちゅう)にもとらわれるな』という教えが『スッタニパータ』に出ているんですね」

それは今おっしゃいましたように、二つの極端があると、それを合わせて、足して二で割る、と。そういうことにまたとらわれてはいけない。

本当に適切な、要点にピタッと当たるということが必要である、と。

『中(ちゅう)』という字はこれは『あたる』とも読みますね」

(中略)

「『中道』という言葉をもた漢訳の仏典では、『主要の道』とも訳していることがございます。『主要』というのは『要(かなめ)の道』ですね。その肝心要(かんじんかなめ)のところにピタッと当たる、という。それが中道の精神なんです」

##### (2) 要点にピタッと当たる

中村 元博士は、「中」を「要点にピタッと当たる」と解釈なさいました。

私は、直観的に「中」は「的中」、「極端」は「的外れ」と解釈しました。

私の無造作な直観的解釈が、中村 元博士のお説と、はからずも一致していたことは、この上なくありがたいことでした。

なればこそ、大先輩も、「これでよい」と、証明してくださったのだと思います。

## 6. スッタニパータの経文

中村 元博士が取り上げられたスッタニパータの教えは、次の部分だと思えます。

### (1) 経文「学生ティッサ・メッテイヤの質問」

1040 ティッサ・メッテイヤさんがたずねた。

「この世で満足している人は誰ですか？ 動揺することがないのは誰ですか？ 両極端を知りつくして、よく考えて、（両極端にも）中間にも汚されない、聡明な人は誰ですか？ あなたは誰を〈偉大な人〉と呼ばれますか？ この世で縫う女（妄執）を超えた人はだれですか？」

1041 師（ブッダ）は答えた、「メッテイヤよ。諸々の欲望に関しては清らかな行いをまもり、妄執を離れて、つねに気をつけ、究め明らかに、安らいに帰した修行者、—— かれには動揺は存在しない。

かれは両極端を知りつくして、よく考えて、（両極端にも）中間にも汚されない。かれを、わたしは（偉大な人）と呼ぶ。かれはこの世で縫う女（妄執）を超えている。」

（中村 元訳『ブッダのことば スッタニパータ』岩波文庫、p.218～219）

### (2) 両極端にも中間にも汚されない

「両極端にも中間にも汚されない」について、中村 元博士は、「二つの対立した極端にとらわれるな。さらに中間にもとらわれるな」と解釈されました。

「中間にとらわれる」とは、「二つの極端があると、それを合わせて、足して二で割る」すなわち、真ん中を求めて、そこに執着するということです。そこに新たな迷いが生じるのです。

### (3) 妄執

なにかにとらわれると、そこから「妄執」が生じ、妄執から貪欲・瞋恚・愚痴が生じます。なにごとにもとらわれなければ「妄執」は生じせんから、貪欲・瞋恚・愚痴も生じません。

## 7. カッチャーヤナの質問

### (1) 経文「カッチャーヤナ」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、尊者カッチャーヤナ（迦旃延）は、世尊のましますところにいたり、世尊を礼拝して、その傍らに坐した。

その傍らに坐した尊者カッチャーヤナは、世尊に申しあげた。

「大徳よ、正見、正見と申しますが、大徳よ、正見とはいったい、どういうことでしょうか」（増谷文雄著『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.151～152）

(2) カッチャーヤナ（迦旃延）

増谷文雄博士の解説には「彼（カッチャーヤナ）は、ウジェーニー（烏惹你）の出身。後年仏十大弟子の一に数えられ、論議第一と称せられた」（増谷文雄著『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p.153）とあります。

「論議」とは、議論をすることではないようです。釈迦牟尼世尊の教えを、相手の境遇や理解力に応じて、分かりやすく、受け入れやすく説いてあげることのようです。

(3) カッチャーヤナの質問

カッチャーヤナは、釈迦牟尼世尊に、「正見とはどういうことでしょうか」と質問しました。

「正見」について、増谷文雄博士は、「いわゆる八正道の第一項目であり、その基体であると称せられる」（同書、p.153）と解説しておられます。

カッチャーヤナは、八正道の根幹となるところを、ずばりと質問したわけです。

これに対して、釈迦牟尼世尊も、ずばりとお答えになります。

3. 有(う)・無(む)

(1) 経文「カッチャーヤナ」

「カッチャーヤナよ、この世間の人々は、たいてい、有か無かの二つの極端に片寄っている」

（増谷文雄著『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p.152）

(2) 的外れな思い込み

① 「有(う)」とは「ものごとは滅しない」と、思い込んでいることだと思われま

す。現在の状態がいつまでも続いて、滅することが無いと思込むことです。

現状が自分に都合の良い状態であれば良い状態のまま、都合の悪い状態であれば都合の悪い状態のまま、いつまでも続くと思込み、さまざまな迷いを生じるのです。

② 「無(む)」とは「ものごとは生じない」と、思い込んでいることだと思われま

す。自分の望むものはこの先も生じないと思込むことがあります。

また、自分に都合の悪いことは、この先も生じないと思込むこともあります。

こうした思い込みから、さまざまな迷いが生じるのです。

4. 有もなく無もない

(1) 経文「カッチャーヤナ」

「カッチャーヤナよ、正しい智慧によって、あるがままにこの世間に生起するものをみるものには、この世間には無というものは無い。また、カッチャーヤナよ、正しい智慧によって、あるがままにこの世間から滅してゆくものをみるものには、この世間には有というものは無い」

（増谷文雄著『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p.152）

## (2) 有もなく無もない

正しい智慧で、世間のものごとを、あるがままに観察しますと、条件によって生じることが分かります。ものごとは生じない（無）ということはないのです。

また、正しい智慧で、世間のものごとを、あるがままに観察しますと、条件によって滅することが分かります。ものごとは滅しない（有）ということはないのです。

ものごとは、条件によって生じたり、滅したりしているのです。

## 4. 執着と苦悩

### (1) 経文「カッチャーヤナ」

「カッチャーヤナよ、この世間の人々は、たいてい、その愛執するところやその所見に取著し、こだわり、とらわれている」（増谷文雄著『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p.152）

### (2) 執着と苦悩

世間の人びと —— すなわち凡夫は、たいてい、欲望の対象に執着したり、自分の考えに執着したりして、そこから離れられなくなっています。

このため、貪欲・瞋恚・愚痴が増大し苦悩が生じますが、この苦悩をどうすることもできないまま、日々を送ることになります。

### (3) 的外れになる理由

こうして欲望の対象に執着したり、自分の考えに執着したりしますと、ものごとのありのままを見ることもできず、考えることもできなくなります。ここに、的外れになる原因があるのです。

## 5. 正見

### (1) 経文「カッチャーヤナ」

「だが、聖なる弟子たるものは、その心の依処に取著し、振りまわされて、〈これがわたしの我なのだ〉ととらわれ、執著し、こだわるところがなく、ただ、苦が生ずれば苦が生じたの見、苦が滅すれば苦が滅したと見て、惑わず、疑わず、他に依ることがない。ここに智が生ずる。カッチャーヤナよ、かくのごときが正見なのである」（増谷文雄著『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p.152～153）

### (2) 「我」へのとらわれ

① ここに、「その心の依処に取著し、振りまわされて、〈これがわたしの我なのだ〉ととらわれ、執著し、こだわる」とあります。

自分が頼りにしているものごとや考え方がありますと、これに執着して振り回されます。

ものごとや考え方に執着している自分を見て、「これが自分なのだ」と思い込み、ますます執着し、こだわって、そこから苦悩を招くこととなります。

② 釈迦牟尼世尊のもとで修行する修行者たちには、そのような執着がありません。ただ、あるがままに、苦が生じた、苦が滅したと見ますから、迷うことはありません。

(3) 智慧が生じる

自分の心身に起きたことを、ありのままに見ていると、そこに智慧が生じるとあります。

智慧とは、四つの聖諦を理解し、実践する力です。

苦が生じたときは、「苦が生じた」とありのままを見ます。

そして、「これが苦である」「これが苦の生起である」とありのままに見ます。

そこから、「これが苦の滅である」「これが苦の滅にいたる道である」とありのままに見ます。

苦の滅にいたる道を実践して苦が滅したときには、「苦が滅した」とありのままに見るのです。

## 6. 中によって法を説く

(1) 経文「カッチャーヤナ」

「カッチャーヤナよ、〈すべては有である〉という。これは一つの極端である。また、〈すべては無である〉という。これももう一つの極端である。

カッチャーヤナよ、如来はこれら二つの極端を離れて、中によって法を説くのである」（増谷文雄著『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.153）

(2) 中によって法を説く

「すべては有である」「すべては無である」というものの見方、考え方は、現実のありのままからかけ離れた、的外れな見方です。

釈迦牟尼世尊は、現実のありのままを見て、人びとの生きる目的に合った（的中した）教えを説くのです。

(3) 生きる目的

生きる目的とは、自分の本質（仏性）を生きることです。

しかし、多くの人びとは、自分の本質を見失い、生きる目的を誤ってしまいます。

多くの人びとは、貪欲を満たすことを人生の目的にしてしまうのです。このため、三毒に支配された日常を送り続けてしまうのです。

(4) 中によって法を説く

釈迦牟尼世尊は、人びとが本来の生きる目的を思い出してほしいと願っています。また、人びとが本来の生きる目的に向かって生きて欲しいと願っています。

しかし、いきなり本来の生きる目的を説いても、理解できないことも分かっています。

釈迦牟尼世尊は、その人に応じ場合に応じて、一歩でも半歩でも、本来の生きる目的に向かった生きかたに近づけるように、その人が実践できる教えを説くのです。

これを、「中によって法を説く」とおっしゃったのだと、私は理解しています。

## 7. 縁起説

### (1) 経文「カッチャーヤナ」

「無明によって行がある。

行によって識がある。

識によって名色がある。

名色によって六処がある。

六処によって触がある。

触によって受がある。

受によって愛がある。

愛によって取がある。

取によって有がある。

有によって生がある。

生によって老死・愁・悲・苦・憂・悩がある。

かくのごときが、このすべての苦の集積のよりてなる原因である。

また、無明を余すところなく滅することによって行の滅がある。

行が滅するがゆえに識の滅がある。

識が滅するがゆえに名色の滅がある。

名色が滅するがゆえに六処の滅がある。

六処が滅するがゆえに触の滅がある。

触が滅するがゆえに受の滅がある。

受が滅するがゆえに愛の滅がある。

愛が滅するがゆえに取の滅がある。

取が滅するがゆえに有の滅がある。

有が滅するがゆえに生の滅がある。

生が滅するがゆえに老死・愁・悲・苦・憂・悩の滅がある。

かくのごときが、このすべての苦の集積の滅である」

(増谷文雄著『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 153)

### (2) 縁起説

縁起説によって、自分に苦が生じる経緯を明らかにします。

また、自分の苦が滅する経緯を明らかにします。

こうして、苦を滅する道を見出し、実践し、苦から解放されるのです。